

令和6年度 清水町総合教育会議 第1回会議議事録（要旨）

1 日 時 令和6年7月24日（水）
開会時刻 午前10時30分
閉会時刻 午前11時35分

2 場 所 清水町役場 4階第1会議室

3 構成員 町長 関義弘
教育長 朝倉和也
教育委員 半田昭博
教育委員 深澤朱美
教育委員 望月めぐみ

オブザーバー 副町長 秋山治美
総務課長 大野明彦
企画課長 前川仁志

事務局	教育総務課長	吉田剛
	こども未来課長	小松義和
	社会教育課長	大嶽知之
	教育総務課参事	田中道雄
	教育総務課課長補佐	鈴木健次
	教育総務課管理主幹	齋藤啓子
	教育支援コーディネーター	渡邊英雄

4 議 事

(1) 不登校児童生徒の現状とその対策について

【町長】

現在、本町の不登校対策の一つとして『かわせみ教室』を開設しており、担当課からも一定の成果を得ているとの報告を受けているところである。

そして、不登校児童生徒の対策として、今後も継続して様々な対策を進めていかなければならぬと考えている。

については、委員の皆様から、現在の状況に対しての感想や提案をはじめ、今後の不登校対策について、御意見をいただきたい。

最初に、現状等について担当課から説明する。

【教育総務課長】

文部科学省の調査による、全国の小中学校児童生徒の不登校（年間 30 日以上の欠席）の状況は、平成 28 年度は 13 万 3,683 人に対し、令和 4 年度は 29 万 9,048 人となり、2 倍以上増加している。

本町においては、数字上では令和 4 年度までほぼ横ばいで推移していたが、令和 5 年度からコロナ感染症の位置づけが 5 類へ移行したことに伴い、それまでの少しの体調不良での休み、いわゆるコロナと疑わしい休みを“出席停止”としていたものを“欠席”扱いとされたため大幅に上昇している。そのため、令和 4 年度と 5 年度の比較は難しいところであるが、令和 5 年度の 130 人の内、令和 4 年度と同様の基準であった場合の人数は確実に増えているのではないかと想定している。

また、不登校の要因について文部科学省調べでは、「無気力、不安」が 51.8% と圧倒的に多い状況にある。これは、いじめや友人関係をめぐる問題などが要因ではなく、象徴的なきっかけがない場合が多い可能性があると言われており、本町における要因についても全国と同様の傾向にある。

本町における不登校児童生徒対策の特筆すべきものとして、適応指導教室（現教育支援センター）として始まった『かわせみ教室』があり、令和 3 年度から、児童生徒及び保護者が、安心して相談や活動ができ、心が元気になるような居場所として開設された。

業務内容として、

- ・通級してくる児童生徒の学習支援等の対応
- ・高校生とその保護者を含む保護者や本人との相談対応
- ・児童生徒と一緒に学校へ登校する支援
- ・中学 3 年生の進路への相談や高校見学への同行
- ・各学校の生徒指導委員会への出席
- ・児童生徒及び保護者が参加する交流会

等、多岐にわたっている。

これは、保護者を含めた個々の困りごとへの対応が様々であることに起因しているためである。

開設時は 1 人で運営していたところ、利用者数及び年間延べ通室日数が右肩上がりの状況である中、令和 5 年度からは 2 人体制としているが、年を追うごとに利用者数と延べ通室日数が増加しており、十分な支援に苦慮している場面も見られている。

この後、開設時から活動していただいている、教育支援コーディネーターに、これまでの経験や感想についてお話しeidただく。

【教育支援コーディネーター】

令和3年4月に町立図書館の視聴覚室をお借りして、適応指導教室(現教育支援センター)としてスタートした『かわせみ教室』は、「誰一人とり残さない教育」の実現を目指し、他の市町の適応指導教室(現教育支援センター)から学びながら、清水町ならではの教室を目標としてきた。

では、清水町ならではの『かわせみ教室』とはどんな場所を言うのか。

スタートしてから様々な子どもとその保護者と接するようになったが、その中で、相談をしている保護者の目には、涙が浮かんでいることが数多くあり、周囲の子どもたちが元気な顔で登校している姿を、自分の子どもの姿に重ねられないもどかしさが、絶えず保護者の胸中に去来しているのではと思った。

私の家には小学生の孫がおり、毎朝家を出していく時に振り返って、明るく手を振りながら登校している。その子がある日、元気なく手を振るようになり、やがて振り向きもせず、下を向いて歩いて行くようになったとしたら。そして、学校に行きたくないと泣きながら訴えてきたら…。

『かわせみ教室』に来ている保護者の皆さんには、このような思いを日常の中で嫌というほど味わってきたのではないか。そのような「保護者の思いや、苦しみに寄り添う教室」、「いつでも涙を流してもいい場所」でありたいと思っている。そして、主役である子ども一人ひとりに寄り添い、「ほっとできる場所」「安心できる場所」になれるようにしたいと思い、ここまできた。

開設から2年が経ち、当初5人の子どもたちから始まった『かわせみ教室』も15人の通室者となり、支援に当たる職員も1人増やしていただいたことにより、支援の幅を広げることができた。それまでのマンツーマンの支援一辺倒だけでなく、小集団の中で、他の仲間とのかかわりあいの中での支援も可能となり、その結果、令和5年度には25名の子どもたちが通室してくるようになった。活動の内容も通常の学習支援だけでなく、バーベキュー会や遠足、保護者会など、子ども同士や保護者同士がかかわりを深められるようなものにも取り組めるようになった。

4年目を迎えた今年は、福祉センター3階の広々とした場所を拠点とし、のびのびとした環境のもとで活動に取り組めている。活動の幅もさらに広がり、小集団による活動場面が増え、週に一度の通室だった子どもが、2回、3回となってきており、増加する子どもたちに対応するために小会議室を別途お借りすることもある。様々な保護者のニーズや子どもへのきめ細かい支援を深めるためには、支援にあたる職員がさらに必要な状況にもなってきている。

本年3月に小学校で2人、中学校で4人の子どもたちが卒業し次のステージへと卒立っていった。その中の一人の保護者からの手紙を紹介する。

「3年間、本当にありがとうございました。小学1年生の5月から学校へ行けなくなり、6年間本当に長く、つらいこともたくさんありましたが、先生には辛い時期を支えていただき本当に感謝の思いでいっぱいです。

先生が話を聞いてくれて、いっぱい涙を流させてくれて、励ましてくれて、私

もまた気力を取り戻すことができました。

先生が2人体制になってからは、よく笑い、より楽しく通うようになり、そんな娘の姿を見れて本当に嬉しかったです。中学校は、正直まだどうなるかわかりませんが、今の娘を見ていると、また一緒に、きっと乗り越えていけるなと感じます。」

このような卒業式の日にいただいた手紙の数々を、今後の糧としていきたいと思っている。

最後に、清水町の『かわせみ教室』は、多くの人に支えられながら、清水町ならではの教室として、今後も保護者の思いと、一人一人の子どもにしっかり寄り添っていく教室でありたいと考えている。

【委員意見】

私は昭和44年に教員になり、担任として色々取り組んできた。

まずは、私の教員としての経験上の意見として述べさせていただく。

一昔前は、「登校拒否」という言葉が多く使われ、学校に行かないことは罪悪だというような風潮があり、親も必死に悩み、無理やり学校に連れて行こうとして、教師もなんとか来させようとしていたが、だんだん時代も変わってきて、医者によっては「登校刺激を与えてはいけない。」とも言われている。

今では、いつでも誰にでも起こりうることを前提に、その子に寄り添い強制せずに指導していく、無理に学校に行かせるような指導はしない状況である。だから不登校は減らないのかと思う。

今の風潮は、何事も子どもの嫌がることは強制しないで、遠回りでも子どもの意思を尊重しながら、よりよい方向に導くような指導がなされていると思う。このような、子どもの人権を最優先とする現在の不登校対策は、子ども達に寄り添った指導がされるようになってきていて、私のような昔の人間にとっては気の遠くなるような丁寧な指導だと感心させられる。

最近では、不登校の児童生徒に対する民間相談機関も増えてきており、角川出版が経営するN高等学校などのフリースクール的な学校も多くなってきたが、その先、大学への進学や就職の後、社会で無事渡り歩いていけるかどうかが気になるところである。

自分が関わった生徒の一人は、1年遅れで高校へ進学後、大学を出て教員になり、私と一緒に学校に勤めていた。本人が好きだった野球部の顧問になり、生き生きとした教員生活に入ったかに見えていたが、パニック状態になり成績もつけられなくなつて、2学期の終わり頃から休みがちになり、冬休み明けから特休に入ってしまい、様子を見ながら復帰したものの、また特休を繰り返し退職してしまった。その後、大学で臨床心理士の資格を取り、臨床心理士として仕事をしていたが、それも継続した勤務ができなかつたようである。

他にも、定時制高校に進んだが、仕事も学校も続かず辞めてしまい、その後も『就

職』『退職』を繰り返している子もいる。

県の教育委員研修会での意見交換会で不登校をテーマに話し合ったが、かつて不登校や不登校傾向を繰り返していた人が大人になって引きこもりになるケースが多く、県内市町でも大人になってからの引きこもりが増加傾向であり心配に思う。

このように、「成人した後の不登校経験者はどうなっているのか。」「世の中から置いていかれていないのか。」など、動向を知りたいところであるが、私の経験からも、子ども時代からの対策というのは大変重要なことであると考える。

各学校の支援員やALTの配置に加え、『かわせみ教室』の担当職員2名の配置など、沼津や三島に比較すれば恵まれた学習環境の中で育っており、一人一人に寄り添った素晴らしい対応ができていると思うので、今後も引き継いでいける体制を整えてほしい。

そのようなことからも、現在、町で開設している『かわせみ教室』の継続はもちろんのこと、機能の向上についても、町として力を入れていくべきものだと思う。

【委員意見】

私が小学校の低学年時代に、「仲良しの子が一時的に登校拒否になり、保護者が自動車に乗せて無理やり学校に連れてきて、友達数人と先生と一緒に、車から無理やり引き離していた。」という光景が鮮明に記憶に残っているが、今の時代ではありえないことだと思う。現在の、不登校ぎみの児童生徒をもつ保護者は、どのような対応をしているのか伺いたい。

今の子どもたちは、のびのびとしている気がするし、大人に対しても自分の考えをわりと主張しているという印象があるが、その反面、個々のこだわりの強さがあり、「自分の許容範囲から抜け出しているものは許せない。そういう気持ちから排除する。そして気になってしまう。」という行動や言動の子が目につくようになってきていて、「こだわりの強さから、歩み寄ることが苦手になってきている。」と思う。このような事が、学校でのトラブルや不登校の原因にもなっているのかと思う。

しかし、このような事は、学校などの集団生活において、人と歩み寄ったり、人から一歩引いたりなどして、そこから社会性を学んで好転していくものなので、保護者や先生などのまわりの大人が、おおらかな気持ちで見守る事ができればと思う。

私が福祉センターを利用する時に『かわせみ教室』の2人の先生方が、子どもたちに寄り添って、細やかな配慮をしながらの指導の様子を見かける。

第2期教育大綱の、だれ一人取り残さない教育の浸透という柱に則り『かわせみ教室』が発足し、開設当初、当事者である子どものサポートだけでなく、保護者にも寄り添い、相談しやすい環境をつくることが目的だったと記憶しているが、今後も持続していくにあたって、子どもたちや保護者に対しての、長いスパンでの指針や目標があれば伺いたい。

それから、今後『かわせみ教室』が拡大していくのではないかと予想されるが、様々な環境の子ども達がいるので、女性のスタッフの配置を検討してはどうか。

【町長】

ただ今の発言の中の、「不登校ぎみの児童生徒の保護者の子どもに対する対応について。」と『かわせみ教室』の長いスパンでの目標について。」の御質問に対し、担当課からの説明を求める。

【教育総務課参事】

▶ 「不登校ぎみの児童生徒の保護者の子どもに対する対応について。」

子ども同様、保護者も自分の子どもが不登校、もしくは不登校に近い状態だということは、非常に苦しい思いであり、子どもに対してどのような対応をするのかは、例えば、「まだ理由もわからず学校へ行き渋りが始まった状況なのか」、「もう家庭では打つ手がなく困り切ってしまった状況なのか」など、置かれた時期や状況によっても異なるものである。また、「保護者自体が社交的なのか」、「周りに相談できる方がいるのか」、「義理の両親との距離感や夫婦の考え方の違いの幅」などにもより様々というのが現状である。

実際に、子どもに対して強制的に登校させようとする親もいないわけではないが、「段階によって、色々自分で調べて藁をもつかむ気持ちで動き回る方」、「仕事などが忙しく正面から全力で向き合えずにさわらざにいる方」、「子どもの思いや状況を受け止め、学校には行く必要はないと考えている方」などと様々であり、傾向としては、昔のように無理に登校させることまではせず、子どものありたいようにさせてあげている保護者が多いように感じる。

特に、不登校が常態化、又は長期にわたる子の親については、どうしてよいのかわからず、学校や関係機関からの働きかけには応じている状態であると感じる。

そのような中、本町の『かわせみ教室』は、「学校に相談するのは敷居が高く、学校に相談しにくい。」と感じている保護者にも、「相談してみようかな。」という選択肢が加わった存在になってきていると思う。

▶ 「『かわせみ教室』の長いスパンでの目標について。」

現在も、「涙を流していい場」、「ほっとできる場」、「保護者自体も安心を感じる場」として、開設当初の目標と変わらずに運営している。

最近では、バーベキュー会や遠足のように、集団生活でしか味わえない体験の場を設定したり、通常時もグループ活動を取り入れるなど、将来社会に出た時のことを考えた取組をしている。

そして、保護者も周りからの孤立感を感じていることが多いので、保護者会の開催により、同じ思いを抱えている保護者同士をつなぐことで、少しでも孤立感が薄まるようにしている。

また、個人個人の思いや状態に寄り添い、丁寧に対応するとともに、様々な意見や対応を取り入れるため、医療関係者やN P O法人などとのつながりを広げている。

【委員意見】

毎月、定例の教育委員会で『かわせみ教室』の活動報告を聞いていると、「清水町には、『かわせみ教室』があるため、何かを抱えている子ども達が孤独にならず安心できる場所が確保されているんだ。」ということがよくわかる。

『かわせみ教室』の活動として、イベントを計画したり、保護者会も開催されたりと、今までずっと悩んでいたことが少しづつ進めているんだと感じている。

ただ、中にはまだまだ色々な悩みを抱えている親子はたくさんいると思う。

『かわせみ教室』は、子どもにとどても、親御さんにとっても、安心な場所であると思うが、実際には色々な家庭環境がある。

母親としての気持ちを考えると、「子どもと向き合っているのが母親。」「1番子どもと接しているのは母親。」「もしかしたら1番悩み苦しんでいるのは、母親かもしれない。」と、私自身も母親として色々な考えが浮かんできてしまう。

そのような中、女性の相談員さんなどがいたら、また少しづつ変わってくるのかも知れないと思う。

これからも、『かわせみ教室』を町で支えていただき、不登校の子どもたちが大人になった時にも、少しでも自分の力で頑張っていけるのを目標に、今後もサポートしていただけたらなと願う。

【委員意見】

不登校児童生徒の人数が増加する傾向が続いているという状況はとても心配である。

私自身の経験や子育て中にあったことなど思い返してみると、私の中学校時代には、「先生に運動部への入部を強要され、そのことに疑問を感じて欠席したくなった。」という思い出がある。

それから、私の子育ての経験では、「私の子どもが、友達からの嫌がらせを受けていて、私たち親にも相談出来なかつた状況だったところ、当時の担任の先生が気付いてくださり、不登校を回避できた。」という経験がある。

このような経験から考えると、不登校になる理由は、きっと子ども一人一人、様々だと思う。

このようなことを考えている中、最近、何かヒントになるのではと感じた本やコンテンツがあるので紹介する。

本間正人著の『100年学習時代』という本で、「今までの日本の教育は教える側からのアプローチが強調されてきたが、人間には自然に湧き出る学習意欲があり、それを引き出してやることが本来の教育である。」また、「生徒が集まる学校は知識の伝達というより、相互のコミュニケーションを図り、議論し、共同作業する場にしていいければいい。」など、興味深い考え方ふれることができるものである。

もう一つ紹介したいのが、オンラインフリースクールが配信している、『ツリーハウス』という音声コンテンツで、親としての不安を共有でき、前向きになれるような

内容が配信されており、不登校児童の親御さんや先生にも参考になるのではと感じた。

今回のテーマである対策として、不登校に歯止めをかける為には、「新しい学校の姿や授業のやり方を模索していくことが必要なのかもしれない。」と感じた。

また、保護者に向けてのセミナー開催も有効ではないかと考える。便利になった分多忙な現代社会には、子どもとの関わり方や言葉かけなど、親も学べる機会を用意すれば受講したい保護者は多いのではないか。

毎月開催されている定例教育委員会では、『かわせみ教室』の活動報告を伺っている。専門職員が配置され、充実したサポート体制が確立されてきていると感じるが、『かわせみ教室』の活動が周知され、利用者が増えていくにつれて、今の2人の先生だけでこなしていけるのかが心配される。

これからのことを考えると、さらに充実した状況をキープしていくようお願いしたい。

【委員意見】

今の子どもたちを見ていると、外で遊ぶ姿を見なくなってしまった。放課後の校庭にも子どもたちの姿は見当たらず、早く下校してしまっていて、一体どこに行ってしまったのか。スポーツ教室とか習い事や塾ならいいが、ゲームやテレビ、最近ではYouTubeなどでの夜更かしも多いのではないかと思う。そのような、不規則な生活が不登校の要因にもなり得るのではないか。そのためには、もっと多く宿題を出した方が良く、音読などの本を読ませる宿題を増やすと良いと思う。

また、最近は授業時数が減ってきて、遠足などの体験的な活動が減ることにより、学校がつまらなくなってきた。学校の特別活動などでは、子どもたちの生き生きとする姿が見られるので、遠足などの校外活動を充実させれば、不登校の子どもが学校に行こうとするきっかけにもなると思う。

以前、人権擁護委員として、いじめに関する相談を沼津市民の方から受けた際に、「直接相手の学校の校長に直談判したい。」とのことであったため、『沼津市いじめ相談ホットライン』を勧めたことがある。人件費や設備面など経費の問題もあるかと思うが、清水町でも、教育相談や就学相談などのホットラインを開設できればと思う。

【教育長】

不登校児童・生徒への対策は、町教育行政として喫緊かつ現時点での最重要課題として認識している。

対策としての最たるものは『かわせみ教室』の運営で、近隣市町の教育委員会や心療内科等から視察を受けるなど、他市町と比較しても一步進んだ教室となっている。

現在2人の元教員により教室を運営しており、利用者や相談件数が増加している中、大きな負担がかかっている状況であるが、子どもたちや保護者との信頼関係を築き上げ、本町教育行政の着目すべき事業の一つになっている。

利用者の様子を見ていると、これまで家を出ることができなかつた子どもが、『か

『かわせみ教室』に通うことができるようになり、教室内で他者とコミュニケーションをとり、生き生きとした笑顔で活動している姿は、非常に感慨深いものである。

また、町長へのメッセージに『かわせみ教室』があったからこそ、我が子は本来の自分らしさが取り戻せた。』と非常にうれしい言葉をいただいたところである。

『かわせみ教室』の運営は、今後ますます不登校の子どもたちが増えていくと見込まれる中、子どもたちやその保護者たちの「心が元気になる場所」として、また、だれ一人取り残さない教育を推進する上で必要不可欠な事業であるので、厳しい財政状況ではあるが、必要人員の確保や安定的な場の提供等、事業の拡充に努めていきたい。

【町長】

教育委員の皆様御自身の経験から導き出された御意見を中心に、御提案や御要望をいただいた。

御意見には、保護者向けのセミナー開催やホットライン開設の御提案などの他、不登校の経験があると、社会人になってからも、引きこもり的な傾向があり、小中学校の頃からの蓄積した対策が必要であるということ。

そして、教育委員の皆様の共通した御意見として、今の『かわせみ教室』の機能向上と、女性のスタッフの配置についての御提案をいただいたので、町としても、今後検討ていきたい。

町の教育行政として様々な問題を抱えている中、不登校児童生徒への対応の一つである『かわせみ教室』について、今日の会議を通じて、より重要性を感じたところである。

大人になる前の、子どもの内からの対策が重要であり、将来の清水町を担っていく世代の健全な育成のためにも、不登校対策をはじめとした、町の教育行政が抱える様々な課題を、一つ一つ着実に解決に向け実行していくことが必要であると考える。

今後においても、委員の皆様から、御意見、御提案をいただきながら取組を進めていき、清水町の教育が子どもたちにとって、より良いものとなるよう努めていく。

(2) その他

【委員意見】

個人的な理想であるが、教育の拠点を作つて教育センターとして、図書館に教育総務課とかわせみ教室と同居させ、また、社会体育を教育委員会に戻して部活動についての機能を持たせる。そして、教職員の研修センター的な役割も持たせて、指導法の充実を図っていく。

また、社会教育課という名称については、文科省では生涯学習の中の社会教育と捉えているように思うので、清水町はなぜ社会教育課なのかが疑問に思う。

それから、西小学校は、外国籍児童の割合が多い状況で、その対策として保護者向けのプリントにはルビを振ったり、特別に外国籍の保護者だけの説明会を設けたり、細かな対応をしているのが見られる。

日常の授業でも、外国籍児童への細かな配慮が見られる反面、その影響か、授業の内容を見ていると、「外国籍児童にとらわれるあまりに、日本人の子どもが取り残されてしまうのでは。それが学力の低下にもつながるのでは。」と、日本人児童の学力低下が懸念される。

増えてきている外国籍児童生徒に対する対応及び、それに伴う日本人児童生徒への対応について、またの機会にでも取り上げていただければと思う。

【町長】

組織の編成については、町の方針として決定しているものなので、今後、そのような機会があるときに、改めて検討させていただく。

外国籍児童生徒の対応等について、近年、外国籍の人口比率が、近隣市町に比べても極めて大きいというのが、近年の清水町の特徴でもある。そのため、増加傾向である外国籍児童生徒に関連する対策については、町でも大変重要な課題であると認識しているので、また別の機会に詳しくお話しできればと思う。

その他、皆様から御発言がないようであれば、議事を終了する。

本日は、率直な意見交換が出来たことに、大変感謝している。

また、皆様から御提案いただいた意見等については、今後、町や教育委員会での検討に活用していければと思う。

議事を終了し、事務局に進行を戻す。

【事務局】

令和6年度第1回清水町総合教育会議 閉会